

# 文学の中の経済と社会

檜 崎 敏 雄

## 1. 経済学における数学と文学との効用

経済学研究の場合において、数学的方法は時として大いに重視されている。いわゆるローザンヌ学派または数理経済学ないし計量経済学の場合などは、それを物語るものである。確かに数学的な函数関係によって、経済現象の推理を進めることは、経済学の研究上、効果的な一方法に違いない。しかしまた一方において、経済学として数学過剰の場合も尠くないようである。例えばマーシャルやピグーやケーンズ（私はわが国の慣例のケーンズとはいわない。かれ自身私の名は *sugar canes* の *canes* のように発音すべきであるといっているからである）は、いづれも数学の試験においても優等生ではあったが、かれらの代表的著作である「経済学原理」、「厚生経済学」、「雇用、利子および貨幣の一般理論」のそれぞれの本文の中では、精緻な数学的説明に出逢うということはない。マーシャルなどにしても、「原理」の附録的叙述の中で、多少の数学的説明を試みているに過ぎないのである。

この点において一言補足的の説明を試みたいと思う。けだしマーシャルに依れば『経済学は……一面において富の研究であるが、他方もっと重要な面において、人間研究の一部である』（A. Marshall, *Principles of Economics*, eighth edition, p. 1.）。これは、もし経済学が終始富の研究に止まるものならば、経済学の研究上、数学的方法を活用することに若干の理由も発見出来るであろうが、かれとしては経済学の研究は、初等数学の重視以上のものであることを感得していたものであることを物語るものではないのか。もちろん経済学の研究に際しても、大きな『あたまの中の数学、心の中の数学』を忘るべきではあるまい。しかし経済学の研究におい

て、小手先の微積分に没頭することに、何の大きな意味があるのであろうか。経済学の研究は、それよりも遙かに雄大な目的を有するものである。ここにケーンズの言葉を引用しよう『経済学の大家は滅多にない天分の組合せを持たねばならぬ。かれは多くの種々の面で高い水準に到達していねばならない。いっしょということは、滅多に見られない諸才能を結合していなければならない。かれはある程度の数学家、歴史家、政治家、哲学者であらねばならない。かれは象徴を解し、言葉で語らねばならない。……かれは将来の目的のために、過去の光の中で現在を研究せねばならない。……かれは芸術家のように、高踏的で清廉であらねばならぬが、しかも時として政治家のように地上に近く居らねばならない』と（J. M. Keynes, *Essays in Biography*, 1933, pp. 140-1）。

随ってケーンズは実践経済生活に関係のない経済学を避ける。かれはケンブリッジの学生として数学、古典、数学の研究に熱心であったが、ことに数学科の試験には優等の成績で合格している。シュンペーターは、その著「マルクスからケーンズまでの大経済学者」(*The Great Economists from Marx to Keynes*)の中で、ケーンズが折角の数学的天分を持ちながら当時決定的な勢力とも思われた数理経済学の潮流から離れたことに対して、不満の意見を述べている。すなわちケーンズは、数理経済学に対して、敵意を持っていたとはいえないが、数理経済学の権威を高めようとはせず、時としては、むしろそれに対して嫌悪の意を示した。理由は、高度の数理経済学は、絶対科学ともいえるものであるが、実践的な経済学については、ほとんど関係はない。ケーンズのあたまを占めているものは、主として政策の問題であった。かれは数学的精緻を蔑視することはなかったけれども、それもある限度を超えると、我慢が出来なかったのであると述べている。

要するにケーンズは、経済学における数学の役割を高く評価せず、経済学はそれに比して遙かに高度の才能を必要とするものと考えているのであり、かれの師マーシャルも、その例外ではないとしている。すなわちケーンズはいうよう『マーシャルは、数学優等試験の第2位であり、また分子物理学を究めようという野心を持っていたのであるが、数理経済学を構成

している初等代数，幾何および微分のむしろばかげたがらくたに対して，知的ないし審美的見地から，いつも軽い蔑視を感じていた……たとえば物理学と異なり，数学的形式であらわしうるような経済理論の骨格部分は，複雑で十分にわかっていない経済事実の経済的解釈に比較すれば極度に安易なものである。またそれが，有益な結果を産むことについては，ほんの僅かしか役に立たぬものが多いのである』と (ibid, pp. 157-8)。

以上のケーンズの言葉は，その通りであると思われ，これはわが国の数理経済学に対する過剰崇拜の諸賢へ，そのままぶっ付けたいものである。そしてそのことは，裏を反せば経済学における文学の重要性を物語るものだといってよい。しかし事はさように簡単には運ばない。例えば自由闊達のアメリカなどにしても，時として経済学と文芸とは全く関連なきものとして扱われている。一例をいえば，現代アメリカの最もすぐれた経済学者の一人であるハーヴァード大学のガルプレース（先年来日したことがありケネディ政権当時の駐印大使であった）は，その著者「自由の期節」(The Liberal Hour) の中で，つぎのように述べている『数年前に東部（アメリカの）の，ある指導的な大学で経済学の若い助教授の身にことが起った。かれは有能なすばらしく冴えもある教師であった。かれは幾つかの，よい書きものをした。特にそのうちの一，二は，独創と技術的巧みさとの最高の専門的注目に値する調和を示したのである。しかしかれは重大な損堪定を持っていた。それというのは，音楽と絵画とに対する熱情であり，物質的幸福の普通のあり方に対しては，病的なまでの無関心であった。かれは石炭ストーブの，ちいさい家にすっかり満足して生活していた。（そんなわけで），議論もなくはなかったが，かれは経済学者としては将来性がないということに，分別くさくも決定された。かれは昇進さしてもらえなかった。この出来ことは，芸術と経済学との間の伝統的な関係を説明している。関係はない（ということ）なのだ。芸術は経済学者のきびしい偏見に用はないのである。芸術家の価値—美的ゴールの優越性についての，あっぱれな，時としては頑固な主張—は経済学者の一本調子の唯物的関心とは逆のものである』と (J. B. Galbraith, The Liberal Hour, 1960, pp. 52-3)。

もとより知的分野を異にする以上、文学ないし芸術と経済学とは区別されるべきことというまでもない。経済学は人間生活における経済の真実を把握せんとするものであり、これに対して文学ないし芸術は、自然界ないし人間界における「美」を表現することをもって、その指導原理とするからである。もちろん芸術の場合、一般的な観点から見て眼を背けるほどの醜い事象であっても、それが人間界の厳粛なシンボルである時に、巨匠の魔状はその一見醜と見ゆるものを、最高の美として表現するであろう。例えばフローレンスの洗礼堂の上に置かれたドナテルロのマドレーヌの彫刻である。それは衰えはてた肉体の上に蓋いかぶさる長髪の老婆の姿であり、過去の罪の処罰のために苦行を伸に捧げようという聖マドレーヌであり、多くの人は一見その醜い姿に眉をひそめるであろうが、そこに現われた真摯な美の輝やきは、ロダンの作品といえども、これに及ばぬとされている。具眼者はこの点を発見する。それは民衆の嘲笑に向って『騎士らのために、われわれは歌う』と答えた、かのローマの歌姫の心意気でもあろうか。名著や名画は、その書かれ描かれた当時においては、社会はこれを無視し、またはこれを嘲笑することが珍らしくない。われらはリストやニーチエの著書またはミレーの絵画などにおいて、これを見出す。

さて再び説く。経済学にとって、文学は無用であるのか。一般に芸術は利潤主義の産業経済の面において、重視されていないかに見えるが一事実そういうことも多い—もちろんそうと限られるものではなく、美術工芸、建築、道路、公園、橋梁、自動車のデザインなど、あらゆる面において、近代的または古典的の美の表現が要求されるのである。その点で有能な芸術家は自ら意識せずとも、人生の偉大な流れの中に立つものであり、偉大な芸術家は、その類稀な個性によって、慣習と戦うために全生涯をかけており、素朴の中に永遠の真理を物語ろうとしている。無能な芸人は、徒らに表面的な色彩を濃厚にしようとしており、青緑や紅色を過剰に使用しようとするのである。しかし天才的な陶工や彫刻家は色彩を利用せずとも、むしろ一般の画家以上に色彩家なのである。例えばウォールター、ペーターの「ルネッサンス」の中に見ゆるイタリーの陶工ロッビア（Lobbia）の

作のように。それは青冷の浅い線が陶器の面を灰かに流れているに過ぎないのである。

いささか文芸論に入りこんだようであるが、いずれにしても数学過剰は避けたいものである。もちろん一つの方法として数学利用は差し支えないものの、文字や言葉で説明可能の場合、特に初等数学を誇示する必要はあるまい。微分積分を並置したところで、経済学の社会科学的性格は生れて来ない。さようなものは、経済事務員や統計課員に一任すればよい。前にも述べたようにマーシャルは数学にも達者であるが、かれの原論の本文中には、これを使用していない。かれは数理経済学的なローザンヌ学派の静的均衡論を超えて、巨視的、動態的理論を経済学に与えようとしている。かれはいうよう『かようなわけで、経済学の主な関心は、良かれ悪しかれ、変化と進歩とに駆り立てられた人間についてである……経済学の中心観念は、その基礎のみを討議する時すら「生ける力と行動」(living force and movement)のそれであらねばならない』と (Marshall, *ibid*, preface, p. xv)。つまりかれはローザンヌ学派の静的理論に対して、動的理論を与えようというのである。方程式そのものからは、動的経済学は生じないということであろう。

それにしても、わが国の一部の経済学者の講ずるところの経済学であるが、数学の過剰は暫らくこれを問わないとしても、二、三行の平易な叙述で済むことを、数頁にわたるまことに退屈な説明に引き延してある。それらにも比すれば、経済学の始祖アダム・スミスを初めとして、初期社会主義者のマルクス、エンゲルス、ラッサールや、近代経済学におけるマーシャル、ピグー、ケーンズ、ハイエク、ガルプレースなどの論述は概ね流暢であり、冗慢または難解ということはない。殊にマルクスの述作などは、かれが画期的な経済学者であることは別として、それは詩と哲学とに満ちている。もちろんマルクスが、万能というわけではない。かれの唯物弁証法は、いかに壮麗な哲学的機構とはいえ、万人にとって「主」たる価値ありや大きな疑問であるが、万人にとって「師」たる価値ありとはいえよう。明治の文人であり医学者であった森鷗外がマルクスを読んだかどうか

はわからないが、かれの文学論の一部において『どんなに巧みに組み立てた形而上学でも、一篇の抒情詩に等しいものであることを知った』といているのは、自然科学者の言として、この際併せ考えてもよい一つのエピソードではないか。それにしても、マルクスの重流または末社の徒のマルクス解説の何と解し難いことであろうか。これらの者は結局エピソゴネン（epigonen おけら）ということであろう。

## 2. 文学と経済学とにおける没現想の問題

文学や経済学はおのおのそれ自体の存在であり、なんらかの社会的意図があってはならないのであるか。換言すれば文芸は芸術のため芸術であって、ひたすら耽美に終始し、また理論経済学は、マックス・ウェーバーのいうか如き、価値判断抜きで経済学であることをその本質とするのであるか。わが国の作家としていえば、谷崎潤一郎などは耽美派の巨匠というべきであろう。すなわちこの人は、女性または女体を生活の中心においてこれを跪拝し、女性に征服されることに男性の幸福を発見するという被虐趣味の徹底した耽美主義の立場に立っている。「刺青」、「幫間」、「悪魔」など、かれの初期の作品から、後年の作、「春琴抄」、「細雪」などの作に至るまで、みなその線に沿っているようように見える。しかしそれはそれで充分に存在の理由を主張し得るものではあるが、同時にまた、われらは谷崎の作品からは、なんらの思想性または社会革新的のものを覗き知ることが出来ず、ただ下町情話ないし関西情調を味わうのみである。それに比較すれば、永井荷風は同じく耽美派といわれ、その作品の多くは遊蕩的、花柳趣味的、江戸情調的であるかの感を与えるけれども、一面において「新婦朝者日記」、「深川の唄」、「牡丹の客」などは、かれの情熱的な明治文化に対する批判を物語るものであり、また「つゆのあとさき」や、「濠東綺譚」などは、社会の下層に沈む女達の魂の底に横わっている善良さを物語る倫理を基本としており、かような点において同じく耽美派といわれながら、谷崎と異なる意識の上に立っている。

しかし谷崎にせよ、永井にせよ、要は芸術のための芸術ということであ

り、文芸の方法を借りて、かどを立てながら、ある種の思想を物語ろうとするものではない。しかしそれはそれなりに十分に存在の価値あるものであり、文学の力により稚拙の思想を現わそうという三文小説とは全く次元を異にする。しかしまた最近の諸種文芸雑誌に見るような代表的作家の性欲描写を中心とする小説に、いかなる存在の理由あるであろうか。性欲描写などは、食堂風景を叙述するようなものであって、特別に人生の意味は発見されないのである。それに付けても想起されることは、明治20年代における当時の卓越せる二人の先覚的文芸作家であった坪内逍遙と森鷗外との間に行なわれたところの文学における「没理想」是非の論争である。当時逍遙は雑誌「早稲田文学」を主宰しており、鷗外は「しがらみ草紙」を刊行していたのであるが、前者は『批評家は、植物学者が植物を見、動物学者が動物を見るように、理想をはなれて、その物を評すべし』としたことに対して、後者は『判断を下さんとする際には、理想なかるべけんや、標準なかるべけんや』と主張したのである。鷗外の所論は、当時のドイツの哲学者ハルトマン（Hartmann Eduard von）の反唯物論的な「無意識者—ヘーゲルの理性とショペンハウアーの意志とを属性とする絶対者—の哲学」を基礎とする認識論、倫理学ないし美学に、依拠したもののようである。これに対して逍遙の意図するところは、狭少な理想に立つ文芸態度—例えば勅善懲悪—を排除して、あたかもシェークスピアの作品に見るような自然主義、写実主義の主張にあったものと見られる。この二人者の論争は—いわば自然主義とロマンティズムとの対立—当時としては啓蒙の効果大であったわけであり、この点は経済学におけるメンガアらウィーン学派とシュモーラアらドイツ歴史学派との間に行なわれた演繹法と帰納法の論争と、水路は異なるままに、同じく研究方法論に貢献したものといつてよい。

文学の場合と同様に、経済学の場合においても、『没理想』の論議を見ることが出来よう。それはマックス・ウェーバーの「社会学上ならびに社会経済的知識上の客観性について」において、主張されているところであり、かれは斯学の批判的客観性を主張している。換言すればかれは、経済

科学の基礎としての倫理学，社会的理念の如き単純主観を排除し，かような理念は個人的のものであり，客観的妥当性を欠くものであるとする。要するにかれは sollen（当為）と sein（存在）とを厳別し，経済学においては理論の面においても，政策の面においても，価値判断の介入を許すべきではなく，経済学者は専ら事象の因果関係または目的と手段との適合性の討究に従うべきものとする。いわゆる『価値からの自由』（wertfreiheit）ということであるが，これは当時の経済学者であるコーン，シュモーラー，フィリップヴィッチらの反対するところとなった。これらの人々は，一般的教養の現実性の上に立つ軌範，または個人にとっても効用ある価値の存在を認めようとするものである。しかし結局ウェーバーは「理想型」（idealtypus）の構想に到達したのであって，それは一定の目的に対する手段の適合性を把握するためには，なんらかの認識手段を必要とするということであり，それは科学的材料として役立つ客観性を有するものとしたのである。

### 3. 文学における社会思想

以上は，文学および経済学における「没理想」ないし「理想」の問題を論じたのであって，おのおのそれらの面における主張を見たのであるが，それはともに理由のあることである。すなわち経済学の場合とすれば，理論の面に見るべきものもなく，ただ理想ないし政策らしいものを長々と述べたところで何に貢献するものでない。由来政策論などは，いかに知性の低い人であっても，何とか駄弁を弄しうるものであり，この点は精緻な理論的研究とは，その学的価値において比較しうべきものではないのである。もちろん一方において優秀な政策論は十分の価値を持つものであり，ピグーの「厚生経済学」（Economics of Welfare）や，ケーンズの「一般理論」（General Theory of Employment, Interest and Money）などに現れた政策論は，絶大の学問的貢献を示すものである。

文芸の場合においても同様であり，芸術のための自由奔放な薫りの高い芸術は，天来の妙音を示すものであり，なまなかに偏狭の思想を盛った文



芸作品などは最低ともいうべきものであろう。これらに対して、なんらかの大きな思想を盛りあげたヴィクトル・ユーゴー、ドストエフスキー、モーリス・バレス、アンドレ・ジイド、ロマン・ローラン、パステルナーク、ヘミングウェイ、スタインベック、フォークナーなどの作品は最高といってもよい。その点に立脚して、文芸作品の中にあらわれた社会思想ないし経済思想の問題について議論を進めたいと思う。

さてこれについて考えた場合に、同じく文芸作品であっても、それが詩であるか、小説であるか、または絵画的彫刻であるかによって、ニュアンスは存在するであろう。詩歌は時世に立脚するというよりも、むしろ永遠の憧憬を物語るものであるが、小説の類は時代色を帯びることが尠くないのであって、小説史と政治史ないし社会史とは、しばしば密接の関係の上に立っている。例えばわが国の明治以後の時期として考えた場合、それが西欧文明の移植が重視された時であっただけに、教養小説、およびそれに類するものが、幅をきかしたことは極めて自然的であった。例えば、福沢諭吉の鉄漿風習打破の「かたわ娘」(明治5年)、中村正直のスマイルの抄訳(明治4年)、大久保勘三郎のデカメロンの抄訳「欧州情話、群芳綺話」(明治15年)、永峰秀樹のアラビアン・ナイトの抄訳「開巻驚奇、暴夜物語」(明治8年)、井上勤のムーアのユートピアの訳「良政府談」(明治15年)、河島敬蔵訳のロメオとジュリエット「露妙寿利戯曲、春情浮世之夢」(明治19年)、坪内雄蔵のジュリアス・シーザーの訳「該撤奇談、自由大なでりのきれあじ刀余波鋭鋒」(明治16年)などは、教養小説ないし翻訳小説の一端を物語るものである。また政治小説としては、東海散士柴四朗の「佳人之奇遇」(明治18年)、矢野竜溪の「経国美談」(明治16年)、末広鉄腸の「雪中梅」(明治19年)、須藤南翠の「縁叢談」(明治19年)などを挙げる事が出来よう。これらの政治小説は、それまで仮名垣魯文、条野友人らいわゆる戯作者の手に委ねられた小説が、知識人の手に移って文明開化の力を示したものとして、当時において大きな文学革新を示すものと見てよいと考える。これは文学の大きな向上といつてよい。魯文らが明治5年教部省へ提出した書面の中には、自らの作を妄語と呼び、また自らを「下劣賤業の私

業』と卑下し『素より戯作は識者に示すに非ず，不識者を導くものに候』と誌している由である。

かように明治初期ないし中期の小説類は，当時の日本人の教養向上のために貢献した点は尠くないと思われるのであるが，小説そのもの，または芸術そのものとしては，文章の巧妙は別として，恐らく高踏的のものであろう。この点において文学芸術の上において画期的の傾向を示したのものとしては，明治16年に東大文科を卒業した「春のやおぼろ」こと坪内逍遙の著「一読三嘆，当世書生氣質」（明治18年），および「小説神随」（同年）であろう。それは小説をもって教訓的または政治的宣伝のための具として考ようとする切利主義的見解を排して，芸術としての小説の独立性を主張したものである。かれは小説神随の中において『美術に人文發育の機関あるは，敢て疑うに及ばざれども，また退いて考ふれば，或いは美術の本義に関して論理の謬誤なきを保せず。いまひと通り其理を論じて予が疑團を表しつべし。夫れ美術という者は，もとより実用の技にあらねば，只管人の心目を娛まして其妙神に入らんことを其目的とはなすべきなり』といい，また『作者の蒙を啓きて我が小説の改良進歩を今より次第に企図しつつ，意には欧土の小説を凌駕し，絵画，音楽，詩歌と共に美術の壇頭に燦然たる我が物語を見まくほりす』とも述べている。要するに逍遙は，文学の独立を唱え，理想，空想，道德，英雄などを排除し，現実の描写をもって文学の本質とすることを主張したものである。従って逍遙にいわすれば『彼の曲亭の傑作なりける八犬伝中の八土の如きは，仁義八行の化物にて，決して人間といい難かり』ということになるのである。

逍遙の主張は道理至極というべきであるが，同時に小説が時代の産物である以上，そしてまた小説は作家の個性を基礎とするものである以上，作品の底になんらかの理念の閃めきのあることを非難すべきではあるまい。例えば最近の二回にわたる世界大戦の前後において，人々はドイツ文学者ないしフランス文学者の，内外支配者に対する反抗の文学を見なかったであろうか。作家に熾烈な個性の燃焼ある以上，かれは社会から逃避して芸術のために生きることもあろうが，実は芸術によって社会を征服することも

ありうるのである。移り行く世界の歴史の中に、または租国の社会の中に、仄かながらも深く自分を投影することは、文学者として意味に満ちた生ではないのか。

絵画などにしても同様である。絵画は、小説はもちろんのこと、詩や俳句よりも遙かに端的に思想を物語ることもあり得よう。ただし偉大な画家は、左様に受け取られることを厭うかも知れない。例えばミレーは、かずかずの名画を残しているが、この貧困な生活の画家は、何か胸に迫るものを画いている。1850年の画、「種播く人」は赤いシャツに青いツポンの粗野な青年が畑に舞い降りる鴉の中で、種を播いているところであるが、それには革命の意味ありといわれた。また1857年の「落穂拾い」は、大衆の貧困を訴えたものと見られ、また1862年の「鋤を持つ男」は、労働をいやしむもの、同時に田園の美を理解していないものと批評された。しかしミレーの預脳は、衆人の想像を超えて遙かに宗教的であり、農民的であり、反パリの的であり、牧歌的であった。かれは自然のままの姿を愛し、社会改革や社会主義など、さような類型的なもの、または煩わしいものには、全然興味がなかったのである。かれはなまなかの知性人の思念以上に、無限のかなた永遠の故郷に眼を注いでいたでもあろう。かように思想を直ちに作品に盛りあげないということは、例えばわが国の知性作家である夏目漱石や芥川竜之介にしても、同様であると思われる。随ってこの点で、時にもの足りなさを感じることがないでもない。ことに漱石がロシアの共産革命の一年前の大正5年1月において、「真影録」の中で、第一次大戦後の見透しについて物語っているつぎの言葉は、かれの思念の甘さを物語るものである。いわく『どんな影響が出て来るか、来て見なければ無論わからないが、吾々が是はと驚くような目覚しい結果は予期しにくい。元来事の起りが、宗教にも道義にも、乃至は一般人類に共通な深い根底を有した思想なり欲求なりにも動かされたものでない以上、何方が勝ったところで、善が栄えるという訳でもなし、又何方が負けたにしたところで、真が勢を失うという事にならず、美が輝きき減ずるといふ羽目にも陥る危険はない。…実際此戦争から人間の信仰に革命を引き起すような結果が出て来ようと

とは思はれない。又従来の倫理観念を一変するような段落が生じようとも考えられない。これが為に美観の標準に狂いが出ようとは、猶更懸念出来ない。何の方向から見ても、吾々の精神生活が急激な変化を受けて、所謂文明なるものの本流に強い角度の方向転換が行はれるような虞はないのである』と。

以上の漱石のことばを見れば、さすがの文学の巨匠も、社会思想や経済思想については、多く読書し、多く思索するということもなく、従ってそれらの点についての洞察や予想は、全くかれの思念以外のことであったように思うのである。

#### 4. 文学における社会思想

先ずわが国のそれについて一言しよう。この点で記憶に残るは、明治中期の作家村上浪六であるが、その作品の反骨ぶりは、社会批判的な爽快さを見せている。その明治24年の作「三日月」は武士の無残に対する市井の一硬骨の物語であるが、その巻頭には『人に骨なく<sup>はらわた</sup>腹は魚河岸にのみある今の世に豈に半文の価値なからんや』とあり、森田思軒もこれを『常に一道稜層の気ありて之を貫く是れ骨なり』と批評している。それから明治29年の浪六の作「当世五人男」なども、私は小学生の頃に読んで感激したものであるが、この五人の男の奔放な生活は、恐らく浪六の理想の型の男たちであろう。そのはしがきには『天下また掌上の物たる当世書生の五人男』と書かれてあり、主人公川上三吉について、浪六は『紅葉する山なみ酔へり其中に、独り醒めたる松はすねもの』との評語を与えている。

ついで黒岩涙香はヴィクトル・ユーゴのレ・ミゼラブルの翻案である「噫無情」（明治35年10月から36年8月にわたって万朝報に連載）などの発表によって非常に有名であったが、当時涙香の説明するところはつぎの如くである『今レ・ミゼラブルを「噫無情」と題し、文音の似通ひたりと云ふ人あり、然れども之を爾うまで考へしには非ず、唯だ社会の無情より、一個人が如何に苦めらるるやを知らしめんとするが原著者の意なりと信じれば、他に適當なる文字の得難きに斯くは命名したるなり』と。またい

わく『ユゴー先生が此書に如何の意を写したるかは余不肖にして能く知らざるなり、之を学友諸氏に質すに、社会組織の不完全にして一個人が心ならざる境遇に<sup>おしおと</sup>擠陥さるるを慨したるなりと云ふ人多し、多分は然るなるべし』と。またユゴー先生の附記は、つぎの如しとして、これを紹介している『法律と習慣とを名として、社会の呵責が此文明の真中に人工の地獄を作り、人の天賦の宿命をば人為の不運を以て妨ぐることの有る限りは、現世の三大問題、即ち労働世界の組織不完全なるに因する男子の墮落、饑渴に因する女子の滅倫、養育の不足の為に児童の衰残、を救うの方法は未だ解釈せられざる限りは心の饑渴の為に衰死する者、社会の或部分に存する限りは以上を約束して広き見解に従い、世界が貧苦と無学とを作り出す限りは、即ち此種の者は必要無きこと能はざる也』と。一言にしていえば、涙香の憂国の志あるいは人道主義を見るべきであろうか。

以上は明治中期における社会批判的な文学であるが、更に大正年代、昭和年代に入っては、続々と社会思想的、又はプロレタリア作品の発表を見ている。たとえば大正10年の前田河広一郎の「三等船客」、昭和7年の小林多喜二の「党生活者」などは、プロレタリア文学の先鞭を付けたものといってもよい。そして一応無産者文人らしい行動に出たものとしては、藤森成吉がいる。かれは東大独文学科を卒業したのち岡山の旧制六高の教授となったが、在職9ヶ月で早くも辞職した。その頃のかれには、工場労働などを扱った作品は見られないが、しかし一般労働者と同様の経験するためといい、花王石鹼の工場に運搬夫として入社し、その後転々として工場をわたり歩いたが、これは道楽や小説の取材などという不真面目なものではないとしている。かれの発表した「狼へ！」という記録ものによると、ジャック・ロンドンの「荒野の叫び」(The Cry of Wilderness)の主人公は、犬から狼になったが、わたしはいわゆるインテリゲンチヤからプロレタリアになろうと思ったといい、知識階級は充分労働階級と融和することが出来るという確信を労働体験から得たとしている。かようにして一年間の労働経験ののち作家生活に入ったのであるが、その頃発表したものには、「何が彼女をそうさせたか」などがある。しかしその女主人公は、種々の

半端仕事を経験したというだけであって、工場労働とは関係がない。ただ行動的には、かれは労農芸術家連盟，前衛芸術家同盟，プロレタリア作家同盟などに参加し，検挙されて転向したという経験はあるが，要するに有島武郎の影響を受けたらしいところの人道主義的，空想的社会主義の作家であるというだけのものであろう。

続いては宮本百合子。お茶の水出の，この頭脳のよい女流文士は，その執筆と組織活動（作家同盟，日本プロレタリア文化連盟などの活動）とによって，他の無産作家たちに影響を与えたものと見られる。作品としては「道標」，「1932年の春」，「刻々」などが聞えているが，その外にかの女の構想のみであって，未発表に終わった「春のある冬」，「十二年」などがある。前者はかの女のプロレタリア文学運動参加の初期，ないしかの女の愛人と結ばれた頃の活動を取り上げる筈であったと伝えられ，また後者はソ連軍のベルリン解放までの時期の百合子と日本の12年を描き出そうという計画であったという事であり，もし脱稿しておれば興味深き作品であったかも知れない。ただし余計なことだが，昭和4，5年頃，私も巴里と柏林とに留学しており，当時その土地で見聞したかの女の動きなり，また私たちの学生の頃，かの女が駒込林町の立派な邸宅から，てんまりのようにまん丸い姿態を悠々人力車を打たして乗り出して来たのを見ると（私の家も当時その近所であった），どうも生粋のプロレタリア作家という風には見えず，一寸気の強いお嬢さんという風に見えた。

つづいては葉山嘉樹。この人の「海に生きる人々」（昭和元年）は長編プロレタリア小説の傑作の一つといわれ，つづいてかれの「労働者の居ない船」，「浚渫船」，「印度の靴」などの短編も佳作として知られている。「海に生きる人々」は，一次大戦当時の室蘭，横浜間就航の貨物船の中の船長対船員の闘争を描いたものであり，登別に置いてある美しい妾へ心急ぐ船長と，負傷に喘ぎながら水夫宅に放置されているボーイ長に同情する船員たちを主役としている。船員たちは要求を船長に突き付けて一応勝つものの，船が横浜に着いた時，かれらを待ち受けたものは，下船命令と水上署のランチであったという筋である。

つづいては労働者自身の作家である徳永直。この人の「太陽のない街」は広く知られているが、丘の上のブルジョアの住宅街と比較して、これは都会の底辺の、空気も濁っている、共同水栓か何かで水も充分使えない、太陽は丘から丘へ隠れんぼしている、ある工場労働者街のことを描いたのである。要するに生活の最も基礎的な日光も水も空気も住宅も充分でない谷底風景を描いたのである。かれは後に本書を絶版に付して批判されたのであるが、5人の家族や両親や兄弟をかかえた境遇を思えば、執筆禁止や刑務所を恐れたことは、やむを得ぬことである。かれの家は、全くの水飲み百姓であり、竹細工の内職をやっていたのであるが、父は軽蔑された輜重輪卒であり、負傷して傷痍金を貰い、それで馬を買うのであるが、14才の直と11才になるその弟とが、馬を扱いかねて雨の坂道で難儀する。馬も大きな涙粒をこぼして泣いている。またかれの家では、軍の残飯を売っていたが、それにつき徳永直は『私の家は乞食の元締めみたいな役割を自づと持っていた』と書いている。

つづいては「癩」ないし「赤蛙」を中心とする島木健作の作品。前者は昭和8年の作であり、かれの左翼運動の結果としての獄生活の或る部分の小説化であり、後者は教科書の中に多く採用されたほどのものであるが、はたしてプロレタリア作品であかは疑問であり、散歩の途上の一情景のスケッチであって、力つきて波間に没する赤蛙の悲壮な最後を描いたものである。

さて以上わが国の左翼的文学の一端を述べたに過ぎないのであるが、われらは西欧の文学作品に見るような熾烈な思想と情熱とを、わが国の作品に多く発見出来るであろうか。元来作家は、ことさら孤独の境涯に置かれている筈であり、孤独は天才のふる郷である。孤独の魂からは、社会を振動するほどの着想も生れてよいのではないか。例えばフランス文学としていえば、モーリス・バレス（Maurice Barrés）のコレット・ボドッシュ（Colette Baudoche）などに見る租国愛ないし国民的エネルギー、さらに雑誌「N・R・F」を中心とするソ連への批判と共感などに見るアンドレ・ジード（André Gide）の誠実さ、さらに雑誌「半月手帖」に拠るシャルル・

— (Charles Péguy) の愛国主義，ついで戦争に反対して租国を追われたロマン・ローラン (Romain Rolland) の民衆愛，さらにアンドレ・マルロー (André Malraux) の左翼的，革命主義的，虚無主義的作品ないし行動については「ドイツの集合点にて」(An rendez-vous allemand) などにおいて，ドイツ軍の占領下に苦しむフランス人の苦悩を歌った詩人ポール・エリュアール (Paul Eluard) などは，十分に注目さるべきであろう。

フランス文学の場会，芯が通っているように思われ，洗練もされているように思う。わが国では文学雑誌の発行数も，小うるさいばかりに多い。フランスでは文芸雑誌の数も尠なく，また発行数も限られ，内容としても詩や評論を主としている。一言にしいえば，くだらぬ盛沢山ということはない。わが国のある作家たちのように，性欲描写に終始することは，人間の理解が浅いといわねばならない。

殊に二次大戦中におけるフランス文人の活動は十分に認められてよい。当時国外に忘命していたモロウ，ロマン，ベルナノスらは，ラジオその他によってフランスの解放を四方に訴え，また国内に留ったヴァレリー，ジード，アランなどの大家たちは，対独協力の文人と異なり，沈黙を守ることによってドイツへの反抗を示し，さらに積極的な人々は地下に潜って，匿名出版によって，抵抗の文学活動を示した。ルイ・アラゴン (Louis Aragon) の「エルザの眼」(Les Yeux d'Elsa)，エリュアール (Paul Eluard) の「詩と真実」(Poesie et Verité) などは，それであって，租国愛とドイツへの抵抗を唄っている。さらに無名作家ヴェルコール (Vercors) の「海の沈黙」(Le Silence de la Mer) という秘密出版は，この意味で記憶すべき作品であり，「私」とその若い姪との家の部屋を接収しているドイツ将校はこの二人から声もかけられず，二人は沈黙を守っている。この将校はフランス文化に非常の関心を持っていたのであるが，これはドイツ軍占領下のフランスのレジスタンス時代に秘密に出版された「深夜叢書版」(Edition de Minuit) の第一号であった。この海のように静かな娘の強さは，思案の末にドイツ青年の求愛を退けたというバレスの描いたドイツ占領下のメッスの娘コレットの比ではない。フランスの美女は，ついにドイ



ツという野獣 (La Belle et la Bête) に服しなかったということであろう。

ついではこの問題に関連してアメリカ作家の場合を考えよう。フランス作家に比較して、アメリカの作家は正規の学校教育を経ていないいわば労働者生活を送った人々であることが尠くない。従ってかれらの場合、ことさらむき出しの社会思想小説ということはないのであるが、われわれはここに野性に満ちた開拓者精神または辺境精神の魅力ある作品に接するのである。資本主義への強い批判を見ることはあるものの、しかし特に社会的反抗に満ちているというこはない。ホイットマン、マーク・ツウェイン、ジャック・ロンドン、トーマス・ウルフ、ドス・パソス、ヘミングウェイ、スタインベック、フォークナーなどの作品はそれを物語っている。さらにまたヘミングウェイの「老人と海」(The Old Man and the Sea)などは、荒海の前の素朴な老人と少年との生活を描きつつ、なんという人間的な人生を示すものであろうか。わが国の流行作家の中には性欲の描写以外に文学はあり得ずという人もいる由であるが、これは人生蔑視に過ぎる。全く高見順の「いやな感じ」である。またわが国では、戦時中における抵抗文学、また戦後の、時として眼にあまった占領軍兵士の行動に対する批判文学も多く見られない。出版物はG・H・Qあま下りの出版政策により左右されていた。フランスに見られたような憂国の出版物もない。例へば久米正雄という作家は「世界春秋」という雑誌の中で、日本米州論すなわち日本は、なまなか講和などするよりも、アメリカの第49州となった方が幸福であると書いた由であるが、全く根性を失なった通俗作家というべきである。また世間からも尊敬されている文化勲章の某作家は、昭和21年4月の雑誌「改造」の論文「国語問題」において、日本語の代りにフランス語を採用すべきことを論じた由であるが、これまた驚くの外はなく、国民や民族や歴史を無視してかかった旧白樺派の、吹けば吹っとぶような小貴族風思考法を曝露したものといつて宜しい。

## 5. 結 語

以上の小論において、私は私どもが時として、出逢う数学過剰の経済学に対して、文字をもって解明しうる経済現象の場合には、ことさら数学方程式を使用する必要のないこと、また理論経済学の政究上「没理想」の方法を採ることはさることながら、政策的方法の活用も十分に理由あること、また文学の面からいえば芸術のための芸術はもちろんとして一面において文明批判的、社会思想示唆的、経済学的な文学も十分に存在の理由あることを論じた次第である。そして文学そのものの中にあらわれた経済問題ないし統済学、すなわちド・クインシー、ラスキン、カーライル、バーナード・ミョオ、エズラパウンドらの業績の論述については、これを次ぎの機会に譲りたいと考える。